

宗教の救済力はどこにあるか

かねこ あきら
金子 昭

■ 天譴論でも神義論でもなく

大災害が起こるたびに、巷間まことしやかに語られるのが天譴論である。しかし、天譴論は、自然災害と人的行為との関わりに対して、最も安易で傍観者的な解釈である。それはしばしば過去志向的な因果論の文脈で語られ、人々を意気阻喪させてしまう。つまり、蓄積された人間の過失が神仏の怒りを招いた結果、かくかくの災害が起こったのだ、というわけである。したり顔で語られる、こうした後向きな因果論では、人は絶対に救われない。天譴論を最も説いてはならないのが、宗教者なのである。

では、神義論（弁神論）だろうか。これなら、宗教者が語るべきではないだろうか。万能で至善な神がいるのに、なぜこのような苦難が起こったのか、神は何ゆえに苦悩や悪や不幸の存在を見許しているのか。いや、そこには実は深い神慮があるのだ。神義論は言葉を尽くして、こうした問いに応答してきたし、今でも応答しようとしている。



けれども、現実の大災害を目の当たりにし、悲嘆にくれる人々を前にしたとき、神義論は果たしてどこまで説得力があるだろうか。ライブニッツの予定調和的な神義論がリスボン大地震で吹き飛んでしまったように、多くの宗教者は東日本大震災に際して語るべき言葉を失ったはずである。そもそも神義論に対して私たちが不満を抱く理由は、この世界の不条理を、強引に楽観論の合理主義で説明しようとするにある。自然的世界にあつては、一方に生命の有意義な創造があれば、他方に生命の無意味な破壊がある。あるがままの自然的世界を虚心坦懐に受け取れば、その認識はどうしても不可解で混沌としたものにならざるをえない。

天譴論にせよ神義論にせよ、現実の世界は性急な合理的解釈を拒む手ごわさを持っている。この問題に徒な思弁をこらす前に、つきつけられた現実そのものに直面し、その中で各人が何をなすべきか、自分に可能な手助けを行うのが先決であろう。実際、多くの宗教者は大災害の報道に接するや、ただちに立ち上がり、まず被災地の人々への救援、または後方支援へと自らのあり方を定位したのである。これは正しい方向であつた。

宗教を測る究極の尺度は、結局のところ世界の教義的な解釈には存しない。それはむしろ、人間をいかに生き生きと倫理の実践に促すかどうかにかかっている。

この点を深く見抜いていた思想家こそ、A・シュヴァイツァーであつた。彼は、人間の内に於いて体験される倫理的人格たる神（愛の神）が、そうした倫理的エネルギーを発動すると主張する。この内なる愛の神の体験は、哲学的な言い方をすれば、愛の意志として発動される「生命への畏敬」の体験でもある。倫理的人格としての愛の神と自然の力としての神（創造の神）

は、たしかに神としては同一の存在には違いない。しかし、その関係は私たちにはどこまでも謎のままである。

私たちはこの絶対の謎を承認し、それに耐えなければならない。そして、ただひたすら自らの内に神秘的に宿る倫理的意志としての愛の神、別言すれば生命への畏敬にのみ拠つて立つべきである。私たちはそこからこそ、倫理的に実践するエネルギーを尽きることなく汲み出すことができる。そうすれば、どんなに世界が苦悩と悲慘に満ちていても、私たちは懷疑主義や無神論に陥ることなく、また安易な神義論に救いを求めることもなく、自他の生命のために主体的な献身を行うことができるのである。

拠つて立つべきは、このような私たちの内なる超越的存在の臨在である。苦難や孤独の中にあつてこそ、神仏の臨在が痛切に感じられる。これらは、私たちを内部から駆動してくれる倫理的存在である。どんなに危機の中にあろうと、自分がなんらかの神仏と共にあると自覚しているとき、私たちは確かな地盤の上に立っていると感じることができる。そして、私たちがなすべきことは、神仏の臨在の下に生きていることを自覚しつつ、人間として直面する難問をねばり強く解決していくことなのである。

大地震や大津波の衝撃、大切な人や財産、地域での暮らしを喪失した悲痛な体験、避難所での過酷な生活。そして今なお続く原発事故の不透明な影響。有りうべからざるこれら非日常的事態を、現実のものとして体験してしまった人は、もはやそれを受け入れ、その中で自らの生きなければならぬ。過酷な現実突然見舞われ、大きな衝撃を受けることを、心理学で